HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	外国人多住地域の教育と国際交流活動：第2部 ブラジル人学校における教育と父母の意識：第6章 ブラジル人学校教師の生活と教育意識
Author(s)	小内, 透
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 19, 83-92
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22644
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P83-92.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第６章　ブラジル人学校教師の生活と教育意識

第１節　基本属性と生活の歩み

今回、Ａ校、Ｂ校、Ｃ校の教師に対するアンケート調査を行った結果、13人から回答を得た。このアンケート調査の結果から、ブラジル人学校教師の生活と教育に対する意識について明らかにしていこう。

まずはじめに、対象者の基本属性について見てみると、13人中10人が女性、全員がブラジル国籍、学歴は大学・大学院が中心、ほとんどが既婚で母国での教員経験を有している（表6-1）。母国での教員経験をもったブラジル国籍の高学歴既婚女性がブラジル人学校の教師の一般的な姿であることがうかがえる。居住地区もサンパウロ州がほとんどで、この点でも共通性が高い。

表6-1　対象者の基本属性

学校	No	性別	年齢	国籍	何世	学歴	結婚	配偶者	居住州	母国直前職	母国最長職
A	①	女	36歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	２世	大学	既婚	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ人	ﾊﾟﾗﾅ	教員	事務職
	②	女	39歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	非日系	不明	既婚	日系人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	教員・研究職	教員
	③	女	42歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	非日系	大学	既婚	日系人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	自営業	技能職
B	④	男	54歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	非日系	大学	既婚	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	教員	教員
	⑤	男	26歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	２世	大学院	未婚	―	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	在学中	学生
	⑥	女	27歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	３世	大学	既婚	日系人	ﾘｵ	教員	教員
	⑦	女	50歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	非日系	大学	既婚	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	教員	教員
	⑧	女	29歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	非日系	専門	既婚	日系人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	教員	学生
	⑨	女	43歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	２世	大学院	既婚	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	教員	教員
	⑩	女	43歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	非日系	大学	既婚	日系人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	教員・公務員	教員
	⑪	男	36歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	３世	大学	既婚	日系人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	教員	教員
C	⑫	女	40歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	非日系	大学	既婚	日系人	ｻﾝﾊﾟｳﾛ	教員・公務員	教員・公務員
	⑬	女	32歳	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	２世	専門	離死別	―	ﾊﾟﾗﾅ	教員	教員

しかし、本人が日系人であるのは6人しかおらず、それ以外は配偶者が日系人である者が5人、本人・配偶者とも非日系人が2人で、日系人かどうかという点では、多様な姿を示している。また、年齢層も同様に多様で、20歳代が3人、30歳代が4人、40歳代が4人、50歳代が2人と20歳代から50歳代まで、各世代にまんべんなく存在している。

ただし、こうした多様な年齢構成の教師集団をもつ学校はＢ校のみで、Ａ校、Ｃ校はアンケートの回答者に限ってみると30歳代と40歳代しか存在しない。なお、Ｂ校の場合、唯一、男性教師がいるという特徴もある。

いずれにしても、日系人であるかどうかという点や年齢に関しては多様であるものの、それ以外の点では、きわめて似通った性格の人々が教師になっていることが理解できる。それは、母国で教員資格を獲得し、教師としての経験を持っている人を学校側が教師として採用した結果によると考えられる。

それでは、こうした特徴をもつ彼女／彼らは、どのようにして現在地に来住し、現在に至っているのであろうか。

表6-2から来日の形態を見ると、単身で来日したのは現在未婚の⑤を含め、2人のみで、夫婦ないし家族で来日するか、先に来日していた配偶者に呼び寄せられる形をとっている。これは、女性が多いことと関係がある。しかし、来日時期は多様で、約8年から10年前に来日した5ケース（①、②、⑤、⑥、⑧）、約3年から5年前に来日した4ケース（③、⑩、⑪、⑬）、約2年前からつい最近来日した4ケース（④、⑦、⑩、⑫）といっただいたい3つのグループに分けられる。

ただし、現在地に来住した年は比較的最近の者がほとんどである。現在地は、①の行田市、⑤の宇都宮市以外、すべて太田市か大泉町であるが、もっとも古くから現在地に居住している⑥の8年4ヶ月を除くと、すべて4年未満で、2年未満も8ケースにのぼる。それは、一方で、ブラジル人の場合来日後移動する者が多いこと、他方で、現在の学校に勤めるために現在地に移動してきた者が多いことを意味している。現在

表6-2　来日と現在地への来住の経緯

学校	No	来日形態	来日年月	現住所	現在地への来住年	来住理由
A	①	夫婦	10年1ヶ月前	行田市	1年7ヶ月前	この学校に勤めるため／高収入の勤め先があった
	②	家族	10年6ヶ月前	大泉町	2年2ヶ月前	同国の友人・知人が多い／その他
	③	家族	4年9ヶ月前	大泉町	3年6ヶ月前	同国の友人・知人が多い
B	④	家族	1年6ヶ月前	太田市	1年6ヶ月前	この学校に勤めるため
	⑤	単身	7年11ヶ月前	宇都宮	2年6ヶ月前	その他
	⑥	単身	8年4ヶ月前	太田市	8年4ヶ月前	派遣会社の紹介
	⑦	家族	1年6ヶ月前	太田市	1年6ヶ月前	この学校に勤めるため
	⑧	家族	10年4ヶ月前	大泉町	3年9ヶ月前	同国の友人・知人が多い
	⑨	夫婦	5年6ヶ月前	太田市	1年6ヶ月前	この学校に勤めるため
	⑩	家族	2年5ヶ月前	大泉町	1年7ヶ月前	同国の友人・知人が多い
	⑪	家族	3年4ヶ月前	太田市	7ヶ月前	この学校に勤めるため
C	⑫	夫婦	8ヶ月前	太田市	8ヶ月前	派遣会社の紹介
	⑬	呼寄	4年9ヶ月前	太田市	4ヶ月前	この学校に勤めるため

表6-3　来日後の仕事

学校	No	日本で経験した仕事	現職期間	現職従事理由	平均手取り月収
A	①	電機・自動車等の生産／調理師	1ヶ月未満	教育に携わりたかった	10万～15万円未満
	②	電機・自動車等の生産／教育関係の仕事	3年1ヶ月	教育に携わりたかった／その他	10万～15万円未満
	③	電機・自動車等の生産／ウェイター	1年9ヶ月	人に勧められて	15万～20万円未満
B	④	教育関係の仕事	1年6ヶ月	その他	25万～30万円未満
	⑤	その他	5ヶ月	人に勧められて	10万～15万円未満
	⑥	教育関係の仕事	1年9ヶ月	教育に携わりたかった	15万～20万円未満
	⑦	教育関係の仕事	不明	その他	20万～25万円未満
	⑧	電機・自動車等の生産／教育関係の仕事	1年5ヶ月	教育に携わりたかった	15万～20万円未満
	⑨	電機・自動車等の生産／教育関係の仕事	2年5ヶ月	教育に携わりたかった	20万～25万円未満
	⑩	電機・自動車等の生産／教育関係の仕事	11ヶ月	教育に携わりたかった	15万～20万円未満
	⑪	教育関係の仕事／その他	2年5ヶ月	教育に携わりたかった	20万～25万円未満
C	⑫	教育関係の仕事	6ヶ月	教育に携わりたかった	15万～20万円未満
	⑬	電機・自動車等の生産／食品加工／清掃の仕事	5ヶ月	教育に携わりたかった	15万～20万円未満

地に来住した理由として「この学校に勤めるため」をあげる者が6人ともっとも多く、ついで「同国の友人・知人が多い」をあげた者が4人である点に、それが示されている。

しかし、こうした事実は、多くの人が「この学校に勤めるまで」日本で教育関係以外の仕事をしていなかったことを意味していない。むしろ、表6-3のように、13人中9人がそれ以外の仕事を経験している。なかでも、「電機・自動車等の生産」に従事した者が多く、7人になる。ほとんどの人たちが母国ブラジルで教師をやっていたため、教師以外の仕事は自分の希望にそったものではなかった。事実、現職に従事するようになった理由を問うと、9名が「教育に携わりたかった」と答えている。これ以外の理由として選択されているのは、「その他」を除くと、「人に勧められて」が2名いるだけであり、「賃金」を理由にあげる者は皆無であった。ちなみに、彼女たちの現在の平均手取り月収は15万～20万円が6人（46.2%）ともっとも多く、ついで20万～25万円と10万～15万円が3人ずつである。25万～30万円の校長を除くと、当地で働くブラジル人女性の平均月収とほとんど変わらない。母国で行っていた仕事を辞してまで出稼ぎにきた日本で、その仕事と賃金水準が変わらずに再び元の仕事が出来ることは、彼女たちにとって幸運なことであったに違いない。

第2節　ブラジル人学校の評価と保護者との関係

こうした経緯でブラジル人学校に勤務することになった彼女／彼らは、ブラジル人学校をどのように評価しているのであろうか。次に、この問題について見ていこう。

まず、「ブラジル人学校の良い点 」に関する評価を見てみよう。表6-4は、この点に関して「ポルトガル語を身につけられる」「ポルトガル語で学ぶので理解しやすい」「ブラジルの文化を身につけられる」

表6-4　ブラジル人学校の良い点

学校	No	ポルトガル語を身につけられる	ポルトガル語で学ぶので理解しやすい	ブラジルの文化を身につけられる	ブラジルに帰って進学するのに有利	ブラジルに帰って就職するのに有利	ブラジル人の友達ができる	子どもが一人で家にいないですむ
A	①	1	2	2	1	2	2	2
	②	2	2	2	1	2	3	3
	③	2	2	2	1	2	2	3
B	④	2	3	3	1	3	1	1
	⑤	2	2	2	1	1	2	1
	⑥	1	1	2	1	1	2	3
	⑦	1	1	1	1	2	2	3
	⑧	1	1	1	1	1	1	4
	⑨	1	1	1	1	1	1	1
	⑩	1	1	1	1	1	1	4
	⑪	2	1	2	1	2	2	2
C	⑫	2	2	2	1	3	3	3
	⑬	1	1	1	1	1	2	2
合計	1	7	7	5	13	6	4	3
	2	6	5	7		5	7	3
	3		1	1		2	2	5
	4							2

[凡例]
1：とてもそう思う　　2：少しそう思う
3：あまりそう思わない　　4：まったくそう思わない

「ブラジルに帰って進学するのに有利」「ブラジルに帰って就職するのに便利」「ブラジル人の友達ができる」「子どもが一人で家にいないですむ」の各項目ごとに評価を聞いた結果をまとめたものである。

ここから、「子どもが一人で家にいないですむ」に関して否定的な評価が下されている以外は、いずれの項目に関してもほとんどが肯定的な評価を行っていることがわかる。今回の調査を行う前に、複数の日本の行政関係者から、「ブラジル人の子どもたちが日本の公立学校をやめて、お金のかかるブラジル人学校に通うようになるのは、学校が終わってからも子どもを預けられる託児所的なところに人気の秘密があるのでは」といった話しを聞くことがあった。しかし、教師の評価を見る限りでは、ブラジル人学校の託児所的な機能を「良い点」としてあげる者は6人と他の項目よりも格段に少なく、唯一過半数を切っている。これ以外の項目がほとんど肯定的な評価になっているのと対照的である。

「子どもが一人で家にいないですむ」以外の項目では、「全くそう思わない」と答える者は存在せず、「あまりそう思わない」と答える者も、「ブラジルに帰って就職するのに便利」「ブラジル人の友達ができる」で各2人、「ポルトガル語で学ぶので理解しやすい」「ブラジルの文化を身につけられる」で各1人のみとなっている。「ポルトガル語を身につけられる」「ブラジルに帰って進学するのに有利」に否定的に答える者は皆無である。とくに「ブラジルに帰って進学するのに有利」に関しては、13人全員が「とてもそう思う」と答えている。

明らかに、教師たちは、「ブラジルに帰って進学するのに有利」であることを筆頭に、ポルトガル語やブラジルの文化を学び身につけられることなどを、ブラジル人学校の利点として考えている。こうした考え方は、一見、彼女たちがブラジル人学校を帰国を前提にした教育機関、あるいは帰国することによって効果が発揮される教育機関として認識していることを示唆しているように思える。

しかし、彼女たちは生徒たちが日本にとどまったとしても、ブラジル人学校の価値が完全になくなるとは考えていないようである。なぜなら、「日本の子どもとの関わりが薄くなりそう」「日本の習慣や文化に触れる機会が少ない」「日本語がわからなくなりそう」「日本で進学しにくくなりそう」「日本で就職しにくくなりそう」といった各項目をブラジル人学校の「悪い点」と回答する者がそれぞれ半数弱にとど

表6-5　ブラジル人学校の悪い点

学校	No	日本の子どもとの関わりが薄くなりそう	日本の習慣や文化に触れる機会が少ない	日本語がわからなくなりそう	学費が高い	学力が落ちそう	日本で進学しにくくなりそう	日本で就職しにくくなりそう
A	①	2	1	1	1	1	1	1
	②	3	3	3	2	3	3	3
	③	1	1	2	4	4	1	1
B	④	4	2	2	3	3	3	3
	⑤	3	3	3	2	3	4	4
	⑥	4	4	4	4	2	2	3
	⑦	3	3	3	3	4	2	2
	⑧	2	2	2	2	4	4	4
	⑨	2	4	3	4	4	1	1
	⑩	2	2	2	2	4	4	4
	⑪	3	3	3	3	4	3	4
C	⑫	4	3	3	3	4	4	3
	⑬	4	1	4	4	無回答	2	4
合計	1	1	3	1	1	1	3	3
	2	4	3	4	4	1	3	1
	3	4	5	6	4	3	3	4
	4	4	2	2	4	7	4	5

［凡例］
1：とてもそう思う　　2：少しそう思う
3：あまりそう思わない　　4：まったくそう思わない

表6-6　日本語能力と日本語を学ぶ志向性

学校	No	会話	読む	聞く	書く	日本語教室
A	①	かなり話せる	ひらがな程度が読める	テレビのニュースがわかる 毎日の仕事のことがわかる	簡単なメモが書ける	通いたい
	②	簡単な内容なら話せる	簡単な雑誌が読める	基本的なことならわかる	簡単なメモが書ける 文字がいくつか書ける	通いたい
	③	簡単な内容なら話せる	ひらがな程度が読める	基本的なことならわかる	簡単なメモが書ける	通ってる
B	④	ほとんど話せない	何も読めない	ほとんど何もわからない	何も書けない	通わない
	⑤	流暢に話せる	新聞が読める	テレビのニュースがわかる	どんな文書でも書ける	非該当
	⑥	かなり話せる	ひらがな程度が読める	テレビのニュースがわかる 日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける	無回答
	⑦	ほとんど話せない	何も読めない	ほとんど何もわからない	何も書けない	通わない
	⑧	かなり話せる	ひらがな程度が読める	日常生活の話題がわかる	何も書けない	無回答
	⑨	流暢に話せる	簡単な雑誌が読める	テレビのニュースがわかる 日常生活の話題がわかる 毎日の仕事のことがわかる	簡単なメモが書ける	無回答
	⑩	かなり話せる	無回答	無回答	無回答	通いたい
	⑪	簡単な内容なら話せる	ひらがな程度が読める	毎日の仕事のことがわかる	文字がいくつか書ける	通いたい
C	⑫	ほとんど話せない	何も読めない	無回答	何も書けない	わからない
	⑬	簡単な内容なら話せる	何も読めない	毎日の仕事のことがわかる	何も書けない	通いたい

まっているからである（表6-5）。

このうち、「日本の習慣や文化に触れる機会が少ない」「日本語がわからなくなりそう」「日本の子どもとの関わりが薄くなりそう」という項目への回答は、A校、B校が「日本語・日本文化」の授業科目を設定し、日本の学校との交流にも前向きである点が関係しているのであろう。もちろん、「日本語・日本文化」の授業といっても、週に1時間程度しか行われないし、日本の学校との交流といっても、数度の経験や今後の希望にすぎない。彼女たちの日本語能力自体、それほど高いものではなく、日本語教室に通って日本語能力を身につけようとする者は1人しかいない（表6-6）。ちなみに、日本の学校との交流経験は、B校が近くの公立中学校の「総合的な学習の時間」に数度の交流を行ったものであり、今後の希望はC校が近くの公立学校とスポーツの練習試合を行いたいと考えているだけである。本格的で継続的な交流は必

ずしも見通しが立っていないのが現状である。むしろ、他県の学校も含めて、ブラジル人学校同士の交流の方がスムーズに進んでいるようである。

その意味では、みずからの勤める学校に対する評価は現実の姿以上に高いものとなっている傾向があるといってもよい。

「日本で進学しにくくなりそう」「日本で就職しにくくなりそう」という項目に対する回答は、その傾向をより一層際だたせている。現実には、ブラジル人学校を出ただけでは、日本の義務教育にあたる中学校卒業の資格さえ手に入れることはできない。そのため、日本の高校や大学への進学は、現在の制度の下では不可能である。当然、それは、日本で就職する場合に、不利な状況をもたらす。しかし、それにもかかわらず、「日本で進学しにくくなりそう」「日本で就職しにくくなりそう」という項目を、ブラジル人学校の「悪い点」とする者は半数弱しかいない。

この結果は、彼女たちの回答が現実を理解した上でのものかどうかによって解釈が異なる。彼女たちの現実に対する誤解・無理解がある場合、回答の結果はそれゆえのこととして解釈される。逆に、現実を理解した上での回答であれば、「日本で進学」できなかったり、「就職」しにくくなったとしても、それは生徒や親が選んだことであり、ブラジル人学校の「悪い点」とはいえないという考え方を示すものと考えることができる。残念ながら、今回のアンケート調査では、日本の教育制度とブラジル人学校との関係についての彼女たちの認識を確認することはできなかった。しかし、彼女たちが、ブラジル人学校の存在価値を現実以上に強く主張しようとする姿勢をもっていることは間違いない。

ブラジル人学校の「悪い点」として尋ねた「学力が落ちそう」「学費が高い」の2項目に対する回答にも、同様な傾向が貫かれている。自らの教師としての自負からか「学力が落ちそう」をブラジル人学校の「悪い点」とする者は2名しかいない。「学費が高い」についても同様に答える者は4名にとどまっている。現実には、各学校とも数万円の授業料がかかり、「出稼ぎ」目的のブラジル人家族にとっては、相当大きな出費になるはずである。日本の公立学校へ通わせた場合、無料であることを考えると、「学費が高い」と感じる傾向はより高くなるはずである。B校ができた当初、少なからぬ日本の行政関係者は「学費が高いので入学者はそれほど増えないのではないか」と予想していた。にもかかわらず、生徒は予想に反して急増している。こうしたブラジル人学校の人気の高さが、教師としての自負と相まって、「学費が高い」とは認めない回答結果をもたらしていると考えることができる。

こうして、ブラジル人学校は「良い点」「悪い点」から見て、生徒たちがブラジルへ帰っても帰らなくても、大きな存在価値をもち、それゆえにたとえ数万円の授業料がかかったとしても高い授業料だとは思わないという教師の意識が明らかになる。その背後には、ブラジル人の子どもたちにとって、優れた教育を行っているという教師自身の強い自負心が存在していることが伺える。

しかし、こうした教師の意識は、すでに見たように、現実以上に自らの勤めている学校の存在価値を高く評価する傾向をともなっている。そのため、教師の意識は親の意識とかみ合わない事態をもたらす可能性をもっている。

それは、教師が保護者に対して、もっと子どもの教育に熱心になるように考えていることからも予想できる。表6-7から保護者への要望を見てみると、質問項目としてあげた「生徒の教育に関して話す機会がほしい」「保護者同士がもっと関わりあってほしい」「学校行事にもっと参加してほしい」「家庭学習にもっと協力的になってほしい」「学校を託児所的に扱わないでほしい」のいずれに関しても、「とてもそう思う」「そう思う」と答える者がほとんどである。このうち、「学校行事にもっと参加してほしい」の場合、すべてが「とてもそう思う」「そう思う」のいずれかであり、「学校を託児所的に扱わないでほしい」では13人中11人が「とてもそう思う」と答えている。いいかえれば、優れた教育を実践していると自負している教師から見ると、親たちは優れた教育のためというより、むしろ託児的な機能のために学校を利用し、家庭学習にも注意を払っていないと批判的にとらえられているといえる。

実際、「教育が経済的な利害関係よりも優先されるべきである」（②）、「子どもに専念してほしい」（⑥）と親をストレートな形で批判する者もいる。このうち、⑥の場合、保護者から「子どもたちの態度

表6-7　保護者への要望

学校	No	生徒の教育に関して話す機会がほしい	保護者同士がもっと関わりあってほしい	学校行事にもっと参加してほしい	家庭学習にもっと協力的になってほしい	学校を託児所的に扱わないでほしい	その他
A	①	1	1	2	1	1	
	②	1	1	1	2	1	教育が経済的な利害関係よりも優先されるべきであること
	③	1	1	2	1	1	
B	④	2	1	1	2	1	
	⑤	3	2	2	3	2	
	⑥	1	1	1	1	1	子どもに専念してほしい
	⑦	3	2	1	1	1	
	⑧	2	3	1	1	1	
	⑨	1	1	1	1	1	
	⑩	2	3	1	1	1	
	⑪	1	2	2	2	1	
C	⑫	2	2	1	3	1	
	⑬	2	2	2	2	4	
合計	1	6	6	8	7	11	
	2	5	5	5	4	1	
	3	2	2		2		
	4					1	

[凡例]
1：とてもそう思う　　2：少しそう思う
3：あまりそう思わない　　4：まったくそう思わない

表6-8　保護者からの相談の機会と相談内容

学校	No	相談を受ける機会	相談内容
A	①	あまりない	しつけ、行動、発達、勉強内容の到達度と理解
	②	たまにある	ブラジルの家族は、ブラジルの学校で受けられるのと同様の学ぶ価値と妥当性を、ここ日本での教育によって得られることを理解したい
	③	たまにある	子どもの学習と行動について
B	④	あまりない	生徒の困難は親の困難に由来する（一般に）
	⑤	あまりない	授業中の生徒の様子
	⑥	よくある	子どもたちの態度と友達との関係について
	⑦	あまりない	読書の習慣、勉強の習慣
	⑧	よくある	学校の活動や授業での生徒の成長について
	⑨	よくある	
	⑩	よくある	学校の活動や授業での生徒の成長について
	⑪	よくある	
C	⑫	あまりない	
	⑬	たまにある	

と友達との関係について」相談を受けることが「よくある」と答えている（表6-8）。それなのに、彼女は「子どもに専念してほしい」と記述している。親が教師に相談すること自体が、子育てを学校に任せきりにする態度の現れとして捉えられているのかもしれない。それだけ、教師たちはブラジル人学校に対する親のとらえ方を批判的なまなざしで見ているのである。

それでも、表6-9を見ると、約半数（7人）の教師たちは、今後さらにブラジル人学校を増やすべきだと考えている。ブラジル人学校の増加は、自らの職場の存立を脅かす可能性もあるので、現状でよいとする者も5人と少なくない。しかし、減らすべきだとする者は1人のみである。教師たちから見ると、親の教育意識が低いにもかかわらず、ブラジル人学校の存在意義を重視し、ブラジル人学校を維持・増加させるべきだというのが大勢なのである。なかには、「青年にもっと職業教育を拡大する方がよい。……夜間学校は働くチャンスを与えるだろう」（④）と、夜間のブラジル人学校の設立を提起する者さえ存在する。

そのため、彼女／彼らの中で子どもをもつ者は1人を除いて全てブラジル人学校ないしブラジル人の託

表6-9　ブラジル人学校の今後に関する意見・理由と子どもが通っている学校

学校	No	意　見	理　　由	子どもが通う学校
A	①	増やすべき		ブラジル人学校
	②	減らすべき	ブラジルで住むにしろ日本で住むにしろ、子どもたちの将来に価値あるものを用意できる学校の質が重要である	ブラジル人託児所 ブラジル人学校
	③	増やすべき	青年にもっと職業教育を拡大する方がよい。人は皆それほど怠惰ではなかった。夜間学校は働くチャンスを与えるだろう	日本の小中学校 ブラジル人学校
B	④	増やすべき	まだ教える学校がない地域が多く存在している	ブラジル人学校
	⑤	現状でよい	現在の日本の経済状況では減っていくかもしれない	非該当
	⑥	増やすべき	皆が望む学校を選べるようになるから	ブラジル人学校
	⑦	現状でよい		ブラジル人学校
	⑧	現状でよい		ブラジル人託児所
	⑨	増やすべき		子どもなし
	⑩	現状でよい		無回答
	⑪	現状でよい		ブラジル人学校
C	⑫	増やすべき		非該当
	⑬	増やすべき		ブラジル人学校

児所に自らの子どもを通わせている。日本の小中学校に子どもを通わせている者も別の子どもはブラジル人学校を選択しているし、ブラジル人学校を増やすべきだと答えている。それだけ、ブラジル人学校の存在を重視しているといえる。

第３節　日常生活と将来の考え方

ところで、ブラジル人学校に勤める彼女たち教師は、同時に生活者でもある。生活者である彼女たちは何を生活の楽しみとしているのだろうか。

表6-10から見ると、たしかに「出稼ぎ」者に特有の、「生活するのに精一杯で楽しみなどない」が4人、「母国の家族・知人と電話で話すこと」を生活の楽しみにする者が4人いる。また、「同国出身者が集まる場所へ行くこと」のように、「出稼ぎ」者同士のコミュニケーションを楽しみにする者も2人いる。

しかし、「好きな趣味をすること」「スポーツをすること」を生活の楽しみとするような、比較的生活にゆとりの感じられる者も6人と少なくない。そのうち、2人（③、⑥）は「日本語や日本文化について学ぶ」を楽しみとしてあげている。だからといって、彼らは帰国意志を捨て日本への定住意志をもつようになっているわけではない。趣味やスポーツを生活の楽しみにする者のうち、そのような志向性をもつ者は皆無である。帰国意志を持ち続けていたとしても、比較的ゆとりのある日常生活を送る者も存在しているのである。

こうして、同じブラジル人であっても、彼らの日常生活の楽しみは様々である。しかし、彼女／彼らの場合、日常生活の満足度に対する評価は、驚くほど似通っている。表6-11からわかるように、「仕事内容」「収入」「現在の住宅」「地域環境」「生活全般」といった項目のいずれに関しても、「不満」と答える者はほとんどいない。「現在の住宅」と「地域環境」のそれぞれに1人ずつしか存在しない。「どちらかといえば不満」を含めても、「現在の住宅」で2人いる以外は、1人いるかいない程度で、それぞれの項目に関して「満足」「どちらかといえば満足」と答える者が圧倒的である。つまり、多様な日常生活が展開されているにもかかわらず、ほとんどの者が現在の生活に不満を感じず、日常生活の満足度が高いといえる。

だからといって、このことは、すでに述べたことからも類推できるように、多くの者が帰国意志を捨て日本への定住意志を強めていることを意味していない。表6-12のように、「よい仕事があったら日本に残りたい」「日本に家族を連れてこられたら残りたい」と、条件付きであっても日本へ定住意志を強めている者は3人にすぎない。しかも、そのうち1人（③）は、「日本に家族を連れてこられたら残りたい」と

表6-10　家族形態と生活の楽しみ

学校	No	居住形態	同居者	生活の楽しみ
A	①	個人で借りたアパート	夫婦子	母国の家族・知人と電話で話すこと 好きな趣味をすること
	②	その他	夫婦子	生活するのに精一杯で楽しみなどない
	③	個人で借りたアパート	夫婦子	日本語や日本文化について学ぶこと 好きな趣味をすること スポーツをすること
B	④	学校で借りたアパート	その他	好きな趣味をすること
	⑤	個人で借りたアパート	一人	好きな趣味をすること スポーツをすること
	⑥	個人で借りたアパート	夫婦子	日本語や日本文化について学ぶこと 好きな趣味をすること スポーツをすること
	⑦	学校で借りたアパート	夫婦子	母国の家族・知人と電話で話すこと
	⑧	個人で借りたアパート	夫婦子	生活するのに精一杯で楽しみなどない
	⑨	その他	その他	同国出身者が集まる場所へ行くこと
	⑩	個人で借りたアパート	夫婦子	母国の家族・知人と電話で話すこと 生活するのに精一杯で楽しみなどない
	⑪	個人で借りたアパート	夫婦子	同国出身者が集まる場所へ行くこと 好きな趣味をすること
C	⑫	個人で借りたアパート	夫婦	母国の家族・知人と電話で話すこと
	⑬	個人で借りたアパート	その他	生活するのに精一杯で楽しみなどない

表6-11　日常生活の満足度

学校	No	仕事内容	収入	現在の住宅	地域環境	生活全般
A	①	2	4	3	1	2
	②	2	2	1	1	2
	③	4	3	5	5	3
B	④	2	1	2	1	2
	⑤	1	1	1	1	1
	⑥	2	2	2	1	2
	⑦	1	2	1	1	2
	⑧	1	2	3	3	3
	⑨	2	2	1	1	2
	⑩	1	2	1	1	3
	⑪	1	2	4	2	2
C	⑫	1	2	1	1	1
	⑬	2	2	2	2	1
合計	1	6	2	6	9	3
	2	6	9	3	2	7
	3		1	2	1	3
	4	1	1	1		
	5			1	1	

[凡例]
1：満足　　2：どちらかといえば満足
3：どちらともいえない
4：どちらかといえば不満　　5：不満

すると同時に、「母国の経済状態が改善したら帰国する」という相反する項目も選び、帰国と定住のはざまで迷っているのが現実である。むしろ、「母国の経済状態が改善したら帰国する」「お金が貯まったら帰国する」のように条件付きながら帰国意志をもつ者が7人と多数派を占めている。帰国意志をもつ者が多数派であるにもかかわらず、多様な日常生活を過ごし、日常生活に不満を感じる者は少ないのである。

そのためもあって、13人中11人が、少なくとも日本にいる間は現在地に「住みたい」と答え、転職希望をもつ者も13人中1人しかいない。ここから、日本にいる間は現在の日常生活を維持し続ける志向性が強いことが明らかになる。

こうした状況は、いうまでもなく、自らの子どもたちの教育に少なからぬ影響をもたらすはずである。

表6-12　定住志向・転職志向

学校	No	日本にとどまりたいか	日本にいる間現在地に住むか	転職希望
A	①	母国の経済状態が改善したら帰国する	住みたい	ある
	②	その他	住みたい	ない
	③	母国の経済状態が改善したら帰国する 日本に家族を連れてこられたら残りたい	無回答	ない
B	④	母国の経済状態が改善したら帰国する	住みたい	ない
	⑤	その他	住みたい	ない
	⑥	母国の経済状態が改善したら帰国する	住みたい	ない
	⑦	母国の経済状態が改善したら帰国する	住みたい	ない
	⑧	母国の経済状態が改善したら帰国する	住みたい	ない
	⑨	日本に家族を連れてこられたら残りたい	住みたい	ない
	⑩	母国の経済状態が改善したら帰国する	住みたい	ない
	⑪	お金が貯まったら帰国する	住みたい	ない
C	⑫	よい仕事があったら日本に残りたい	必ず移動しなければならない	ない
	⑬	よい仕事があったら日本に残りたい	住みたい	ない

表6-13　子どもに対する教育期待

学校	No	学歴期待				高校以上の学校（日本かブラジルか）
		長　男	長　女	他男子	他女子	
A	①	－	大学院	－	大学院	どちらでもよい
	②	大学院	－	－	大学院	どちらでもよい
	③	大学院	大学院	－	－	どちらでもよい
B	④	大学	－	－	－	ブラジルの学校
	⑤	－	－	－	－	－
	⑥	大学院	－	－	－	ブラジルの学校
	⑦	大学院	－	－	－	ブラジルの学校
	⑧	－	大学院	－	－	どちらでもよい
	⑨	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答
	⑩	大学院	大学院	大学院	大学院	どちらでもよい
	⑪	－	大学院	－	大学院	どちらでもよい
C	⑫	短大	短大	大学	－	ブラジルの学校
	⑬	大学院	－	大学院	－	どちらでもよい

注）－は該当する子どもがいないことを示す。

帰国意志を持ち続けている者が多数派でありながら、その帰国意志も条件付きであるためである。

そこで、自らの子どもたちに対する教育期待を見てみると、表6-13のように、圧倒的に高学歴志向であることがうかがえる。子どもが男であろうと女であろうと、ほとんどの者が「大学院」まで通わせたいと答えている。ただし、高校以上の学校としてブラジルの学校がよいか日本の学校がよいかという設問に対しては、4人がブラジルの学校、7人がどちらでもよいと意見が分かれている。この設問に回答のあった11人のうち、7人がどちらでもよいとしているのは、条件ができれば帰国したいという意志をもちながらなかなかその条件ができず帰国できないという現実を反映したものであろう。だが同時に、日本とブラジルの教育制度の壁に対する認識が希薄であることも示唆している。これは、すでに見たように、ブラジル人学校に通うことが日本の学校へ進学する上で不利になるという点を、ブラジル人学校の「悪い点」として理解する者が少なかったことと似通っている。

こうして、ブラジル人学校の教師たちは、かつて母国で教師経験をもった人たちがほとんどで、教育の専門家として強い自負心をもちながら教育実践に取り組んでおり、その際、ブラジルの教育制度に固執していないことが明らかになる。その背後には、一方で、帰国意志となかなか帰国できない現実とのギャップの中で教師としても自らの子どもの親としても明確な教育戦略がとりきれないこと、他方で、日本とブラジルの教育制度間の壁に対する認識の薄さが横たわっている。いいかえれば、彼女たちの場合、学校の中での教育実践に関しては、専門家としての力量が発揮されているとしても、国境をこえた教育を実現し

ていく上で教室の教育実践をこえた新たな視点や方法が必要であるという問題意識は、必ずしも生み出されていないということである。その意味で、これがブラジル人教師にとって一つの大きな課題であるといえよう。

（小内　透）